

わが聲の五十となりぬいかのぼり 風

藤田湘子

男には男の声がある。声変わりをした青年期から、気力にあふれた壮年期を過ぎ、仕事や俳句に充実した四十、五十代の中年期の声へと。しかし、昭和39年の「鷹」創刊後、不本意にも秋櫻子の忌諱に触れ「馬酔木」を離れ、俳壇や出版社からは少なからぬ影響を受けていた時代とも重なる。

湘子先生は俳句の披講が得意であつた。落語家や演劇人とも交流があり、太くよく通る声で、かつてのNHKアナウンサーと同等以上に、鼻濁音さえも明瞭に意識して発声された。

かつて、青空へと白糸を引き、他を圧倒して高く高く上がる風は、男子の憧れであつた。

1976年（S51.01.11作） 第五句集『春祭』 鑑賞・轍郁摩